

鵝湖寺にて陸子寿に和す（朱熹）

徳義 風流 夙に 欽う 所

別離 三載 更に 心に 関かる

偶 藜杖を 扶いて 寒谷に 出で

又 籃輿を 枉げて 遠岑を 度る

旧学の 商量 邃密を 加え

新知の 培養 転た 深沈

却つて 愁う 説いて 無言の 処に

信ぜず 人間に 古今 有るを

徳義風流夙所欽 別離三載更關心
偶扶藜杖出寒谷 又枉籃輿度遠岑
舊學商量加邃密 新知培養轉深沈
却愁説到無言處 不信心間有古今

解説 朱熹は兄弟と鵝湖に集合し論弁した。これは「鵝湖の会」として有名で、この会合の間に鵝湖のあたりを散策しながら唱和した詩です。

語釈 ※鵝湖寺||旧名を荷湖といい、龔氏きんしと言う人物が鵝鳥（オオム）を飼育したことから鵝湖と改名した寺。 ※陸子寿||陸九齡のこと。 ※和||和韻のこと。他人の詩に韻を合わせて詩をつくること。 ※徳義||道德になつた本分。

※風流||流風も同じ。 ※夙||以前から。 ※欽||うやまう。 ※関心||心にかける。 ※偶||気のむくままに。 ※藜杖||あかぎの茎で作つた杖。 ※寒谷||人けのない谷。 ※籃輿||竹製のこし。 ※枉||わざわざ来る。 ※岑||嶺、山が険しくそびえている所。 ※商量||はかり考える。 ※邃密||深く、くわしい。 ※転||まします。 ※深沈||静かで奥深いさま。 ※却||反対に。

通釈 あなたの道徳になつた本分や先人の遺風のなごりは、以前から敬つていました。別れてから三年の間、いつもあなたのことを心にかけてきました。あなたは気のむくままに藜の杖について、人けのない谷に出かけ、またこしに乗つて遠くの嶺を越えて来られた。あなたは、以前学んだ学問の思索がいつそう深く詳しくなり、新しく学んだ知識を發達させ、奥深さを加えておられることを知りました。それがかえつて心配です。というのは、あなたが、やがて言葉のいらぬ境に達した時、こうしてお話が出来ないのではないか、と思うからです。人の世に昔は聖人がいたが、今はいないということを言うけれど、信じられません。あなたを見れば古の聖人の如き人物と思うのです。